

タヌキモ及びムジナモの古記録に就いて

佐藤安司

ムジナモを最初に記録したのは英国人ブルケネットで、1696年ロンドンで刊行したその図譜に *Lenticula palustris Indica* の名で記載した(図1参照)。インド採集の標本に対して命名したものらしく、ヨーロッパの自生種が記録されるのは半世紀程後のことになる。

これに対してヨーロッパに豊産するタヌキモの方はかなり古くから記録されていて最も古くはゲスネルによって *Lentibularia* の名を与えられ、更に1576年にはローベルが *Millefolium. aquat. flore. luleo. galericulata* の名でその図譜に載せ、1590年にはタベルナエモンタナが *Foeniculum aquat galericulatum* の名を与えている。パウヒンは1623年これらを整理し、新たに *Millefolium aquat lenticulatum* の名称を以て記載した。これらはいずれもブルガリス種に該当するものと思われる。ミレフォリウムの名前は他にもアキレアやラナンキュラスの仲間にも使われていた為、リヴィヌスは1690年、ゲスネルの用いたレンチブラリアの名を採用し、これはやがて1719年にはヴァイラン及びディルレンに受け継がれ、広く用いられるようになった。ブルガリス種に対しては他にフランクの用いた *Filipendula aquatica major*, ルドベックの用いた *Filipendula aquatica millefolia reticulata* の名称が記録されている。

ミレフォリウムの名は他にもパーキンソン、ヘルマン、前述のブルケネットらによってタヌキモの名称として引き続き使用されたが、中でもブルケネットが *Millefolium palustre. galericulatum minus* の名で記したものは現在のミノール種を指すと云われ、ポッコンが1697年に記載した *Aparine aquis innatans trevisana* と並

んでミノール種の最も古い記録であるが、図を見ただけではこれをヒメタヌキモと同定するのは難かしくように思える(図2参照)。

その後、海外植物の知識が広まるにつれて新しい種類も幾つか記載された。レーデがその著書マラバル植物誌(1678~1703年刊)9巻に *Nelipu* の名で記したものはヘルマン及びブルマンがそれぞれのセイロン植物誌の中に *Rudhumeti*, *Ranahendya* 等の名で記録したものと同じでありミミカキグサの類のカエルレア種と云われている。アムステルダム在住のコンメリンが *Planta aquatica aphyllous repens* の名前 で記載したのも同一であるとされている。おそらく前記ヘルマンによりセイロン産種を贈られたのではなかろうか。1703年にはブルミエーが *Linaria palustris faeniculi folio* の名で

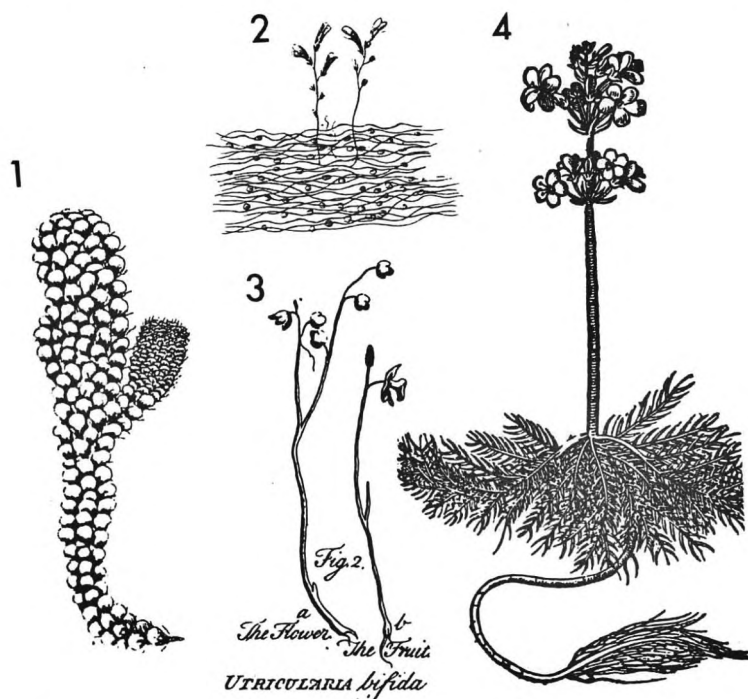


図1~4. 1. 最初に記録されたムジナモ(ブルケネット「植物図譜」より) 2. ウトリキュラリア・ミノールの図(同、1696年刊) 3. ミミカキグサの図(オズベック「中国旅行記」より) 4. タヌキモの図(タベルナエモンタナ「植物図譜」より)

フォリオサ種を記述している。アフリカから新大陸に広く分布するタヌキモの一種である。北米産のものでは1755年にグロノビウスガスプラタ及びギッパに該当する二種を記述しており、日本のミミカキグサ(ビフィダ)も中国産のものが1757年オズベックによって記載されている。オズベックは著書「中国旅行記」の1751年10月24日の項で次の様に述べている。「今日私は水辺の植物を採集する新しい機会を得た。ウトリクラリア・ビフィダはスウェーデンに産するブルガリス種に大変よく似ているが、いくらか小さい。本種は谷間の低湿地に生えるもので水

中に生える事はない。未だかつて見出されたことのないものであるから私は即座に次の様な記載をまとめた一後略一。」彼は英文に依る簡単な記載と、併せてみずから描いた図を載せている(図3参照)。

尚、最後になるが前述のタベルナエモンタナの描いたブルガリス種の図を掲げておく。彼の大図譜「Eicones Plantarum」はパウヒンの手を経て更に後になって復刻されたが、その中に *Foeniculum aquaticum* の名を以て描かれているのがこの図である(図4参照)。

(1982.11.5.)

明石市下ヶ池の水生植物

角野康郎

(神戸大学教養部)

<はじめに>

兵庫県播州平野(姫路平野)の東部に位置する明石市から加古川市にかけての一带は、全国でも有数の溜池地帯である。しかし、このあたりは大阪や神戸への通勤圏として急激に宅地開発が進み、溜池も次々と埋め立てられてきている。それにともない、溜池に生活する動物や植物たちも、消えゆく運命にさらされている。

ここに紹介する下ヶ池も、今年限りでその大部分が姿を消すことになった。新設高校建設のために埋め立てられるからである。この池は、明石市大久保町、山陽電鉄中八木駅の近くに位置し、東西約240m、南北約180mで、最大水深1m弱の富栄養化した池であるが、オニバスをはじめ、さまざまな水生植物の見られる、たいへん興味深い所であった。わずか2年間ではあったが、私はこの池の水生植物の観察を続けてきた。ここでは、この間にこの池で見たことを整理し、その最後の姿を書きとどめておきたいと思う。

<1981年の様子>

私がこの池で調査を始めたのは、米国サウスウエスト・テキサス州立大学の E. Schneider 博士が、オニバスの研究のために来日された1981年7月からである。この年の調査はオニバスとヒシ類に集中していて、他の水生植物については、出現を記録しておく程度だった。その記録によると、この池にはオニバス、オニビシ(ヒシも混生)、トチカガミ、ウキクサ、ヒナウキクサ、そして周

辺にマコモが帯状に広がり、所々にヒメガマ、ヨシ、キシユスズメノヒエなどがはびこっていた。

Schneider 博士が滞在された3週間の間、連日のようにゴムボートを浮かべて調査しており、少なくとも水面に浮いている植物については見落しはないと思う。沈水植物は私どもの目にふれなかった。しかし、この池ははなはだ透明度が悪く、水中は見透せなかったし、採集用具等で水底を詳しくさぐったわけではないので、沈水植物が生育していなかったという断言はさけておく。

<1982年>

昨年の秋おそく(11月下旬)には、池の水は抜かれていた。そして、この冬から6月頃まで、第1期の工事が続いた。この工事は下ヶ池の東側のごく一部を、農業用水用の池として残すためのもので、その池のコンクリート堤と金網の囲いが作られた。この工事にともなって下ヶ池の南側は、幅約10mにわたって工事用車両の通路とするために埋め立てられたが、他の部分はほとんど手がつけられずに、干上がったまま5月まで放置された。本格的な埋め立て工事は、今年の秋以降になることを現場の人から聞かされた。

5月になると、ついこの間まで干上がってひび割れていた池底が、緑一色の草原に変わった。周辺から種子が飛んできたのであろう、ヒメガマとセイタカアワダチソウの実生がびっしりと生えてきたのである。それにオオイヌタデ、アメリカセンダングサ、タガラシなども混じ